

言葉は鳥のように……

作家 石津 ちひろ

今から一年前の冬、神奈川県にある羽島中学校の生徒たちに会う機会があった。総合的な学習の時間に“ことはコースを専攻している一年生たちの前で、言葉の魅力について語ってほしい、といわれたのだ。その直前に、ポール・ヴァレリーが残したというこんな内容の文章を読んだばかりだった。

「詩の言葉は、羽のようであく、鳥のようであくなければならない。空中に放たれたとき、羽は地面に落ちていくが、鳥は空へはたいていく……」

こうしたいきさつもあって、羽島中学の生徒たちとの出会いには、なにか運命的なものを感じた。

まずは、さまざまな言葉あそびの紹介から始める。たとえば回文では、“よろこぶとりとぶころよ（喜ぶ鳥 飛ぶ頃よ）”などとその場で作ってみせた。

そしてアナグラム（文字の並べかえ）では、草野心平が“ペンの細工師”となり、与謝野晶子が“このよき朝”になり、そして武満徹が“音 見つけたる”になるのだ……といったようなことを説明する。

みんなはずっと目を輝かせながら、私の話を聞いてくれた。さらに彼ら自身の名前を使ってアナグラムの例を示すと、いつそ自身を乗り出してきた。

ついでみんなにも、言葉あそびの実践をしてみよう。すると、それぞれが懸命に取り組み、個性豊かな作品を披露してくれた。泣いたテスト、捨てたいな“という回文を作った子もいれば、“さわられる”を並べかえると、皿割れる“になる……”と発表した子もいた。

最後に、詩集『あしたのあたしはあたらしいあたし』に収める予定の詩（当時はまだ、原稿用紙の状態）を朗読して、聴いてもらった。すると、これまでは全くちがった真剣な表情で、熱心に耳を傾けてくれる。

こんなふうに、素直で感受性の豊かな中学生たちとひとときを過ごせたのは、なんと

しあわせなこと……と感じていたら、予想もしなかった幸運が私を待ち受けていた。数日後、彼らひとりひとりが書いてくれた、つぎのようなメッセージが届いたのだ。

「この機会を逃したら一生できないような経験ができて、よかった」

「読んでくれた詩は本当によくて、拍手をして手が痛くなるほど感動しました。とくに『ボブナみき』は、一つ一つの言葉が良くてもうドキドキして、そんな風景が目につかんできました」

…… 略 ……

生徒たちがこつとした感想を抱いてくれたことは、もちろん嬉しかった。けれども、それ以上に喜ばしいと思ったのは、く素直に自分の感情を表現できる中学生がたくさんいる……ということだった。

さらに驚いたことに、（私の名前を使った）折り句のなかに自分の決意を書いてくれた、S・Y君という男子生徒がいたのだ。

まさしく言葉が、鳥のごとく空に向かってはばいた良い例だと思つので、最後に紹介させていただきたい。

- ① み深く
- ② しゃれた言葉をありがと
- ③ ずっとこの日は忘れない
- ④ ちよつと恥ずかしげにだけ
- ⑤ ひろく心を持ってして
- ⑥ まんあふれる言葉の世界を作りあげようと思います。